
帰らない人

黴菌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帰らない人

【NZコード】

N5197A

【作者名】

黴菌

【あらすじ】

親は俺に心の広い人間になれと言う意味で『弘』という名前つけた。お前はヒロっていきなり呼んだな。その図々しさも好きだったよ。早くお前にまた会いたいよ。絶対帰つてこいよ。約束は守るもんだろ。帰らない人…。

俺がガキの時、両親は事故で死んだ。

それから19歳になる今まで俺は親戚の家で育つた。

今日俺は一人暮らしを始める。

アパートはもう見つけてある。

大学までは徒歩20分だし家賃もなかなかだったので、すぐに決定した。

最近かつた車でようやくアパートに着いた。

自分の部屋に入つて、
少しの手荷物を置くと、

すぐに暇がやつてきた。

そんな時呼び鈴が鳴った

俺の部屋のではないだろうと思い、無視していたが何度も鳴るので俺の所だとわかった。俺は急いで玄関まで走つていった

勢いよくドアを開けたせいで呼び鈴を押した人物の顔面に当たつたのがわかつた。

その人はどうやら男のようだった。

顔をおさえてよろめいていた。

「大丈夫…ですか？？」

俺が覗き込むように聞いた。

「大丈夫やから…気にせんといてや… いてえ…」

そう言って男は顔をあげた。

羨しい程整つた顔の関西人だった。

「あの…ちょっと運ぶん手伝ってくれへん？俺一人じゃ無理そりやから。」

仕方なく俺は男の手伝いをする事になった。

男の部屋は俺の隣だった。

男が運んで欲しいと言ったのは大きな箪笥だった。

俺は男と協力してなんとか部屋に運び込んだ。

「ありがと。もうええで。あつといいで名前はなんてゆうん？」

親が広い心を持つ人間になれと言う意味で付けた名前…。

「弘…大谷弘です。そつちはなんていふんですか？」

「俺は華家田隆！！隆でええから。後敬語つかわんでええで。ヒロも大学生やろ？勘やけど（笑）」

笑うと余計にいい顔をしていた。

「正解。片岡大学つて所だよ。」

「まじで…？俺と一緒にやん！運命やん…！赤い糸や～（笑）」

「キモい事言つなあ～！（笑）」

俺らはすぐ元気だけた。

簡単に…。

でも強い絆で結ばれた。

それから何ヶ月か経つた。

俺はいつも通り隆と一緒に大学に行こうとした。

隆の部屋の呼び鈴を押した。

いつもはすぐにでてきて、笑いながらおはよひつて言ひのこ。元のひづり。

いくら待つても隆は出でこなかつた。

「隆へ？ いるのか？ なんかあつたのかあ？ ？」

俺は隆の部屋の前で言つた。

「うぬせえつ！ ほつとけつて！ ！」

いつもと様子が違つた。

隆の罵声を初めて聞いた。

「隆？ なんかあつたのか？ ？」

「だから俺はいいから先行けよーーー！」

俺は腹が立つて

隆を置いて一人で大学へ向つた。

どうやら隆は後から大学に来ていたようだつた。

そのことが余計に腹がたつて、俺は一人で帰ろうと考えていた。

隆が何か話しかけてこようとしていたが、俺は気付かないフリをして一人で帰つた。

『明日謝りに行こう…隆に何か事情があつたのかもしれないし…そうするか…。』

そう思つて俺は眠りに着いた。

夜中に隆の部屋のドアが閉じる音で目覚めた。
どうやら隆が出かけたようだつた。

俺はその不自然な行動を寝ぼけていたせいか、気にもとめずにまた眠りについた。

今度は携帯の鳴る音で目が覚めた。

窓を見るとまだ外は暗かつた。

俺は寝ぼけながらも携帯を手に取った。

携帯の画面には、密かに俺が想いを寄せていた瑠璃だつた。

なんでこんな時間に?と思いつつ、電話にでた。

「 もうおしゃべり出した?.?.」

瑠璃の声にいつも落ち着きはない、とにかく異常だった。

俺の眠気は一気に飛んでいた。

「落ち着け！－何があった？」

「隆が…隆が…！」

隆の名前が出て来た瞬間、俺も正気を失つてしまいそうだった。

「とりあえず何処だ！－？今すぐいくから！」

俺は瑠璃から聞いた場所へ車をとばした。

車が目的地についた。

救急車の赤いライトがチカチカしていた。

大きなトラックがガードレールに突っ込んでいた。

誰かが運ばれていて…

男が運ばれていて

羨しい程顔が整つた男で…

華家田 隆

言葉が出なかつた。

瑠璃が近寄つてきた。

「ヒロつ……隆……がつ……うつ……」

瑠璃は泣きじやくつていた。

でもそんな事は俺にとつて既に関係なくて……
瑠璃を押し退けて隆のもとへ走つた。

もう少しどと書き所で

救急隊員らしき人物に止められた。

「隆！…おい…起きてんだろ…？怒ってシカトしてるだけなんだろ…？」

願うつようつに俺は叫んだ。

でも…その願いは叶わなかつた。

「…残念ですが…彼はもう…」

俺は気付くと隆の実家にいた。

黒かつた。

みんなが泣いていた。

葬式だという事がわかつた。

俺は涙も流せなかつた。

家に着いた。

俺は一人で一点を見つめていた。

何故涙が出ないのだろう？

悲しいの……。

いや……悲しそうなから……脳が起きてくれないのだ。

一週間が経った頃だと思つ。

あれから何も食べていない。

眠つてもいい。

ポストから手紙が来ていた。

しかし見る気もなかつた。

トイレに行きたくなつた。

何も飲まないとは言つても、体の循環で尿意はくるらしい。

トイレから出た時手紙が目にに入った。

俺は懐かしい文字に言葉をなくした。

『華家田隆より』

俺は意外にも冷静に手紙に手を伸して開いた。

『ヒロへ』

隆との思い出が巡った。

『これをお前が読んでる時には俺は死んでるんやろな。大切な人を守るためや。』

瑠璃か…。

隆は瑠璃が好きだった。

俺はそれに気付いていた。

あいつに勝つ自信はなかったから…俺はこの想いを隠していた。

瑠璃も隆といつも楽しそうに喋っていたから…諦めていた。

『あのな…今までいえんやつたけど…信じれへんかもしれんけど

…俺人の心の声が聞こえるねん…。聞きたくなくても…いつも聞こえた。…苦しかった…。』

俺は隆が苦しんでいる事に気付いてやれなかつた…。

『みんな嘘付きたや…心と違う事を言つて生きてた。それが普通なんやううけど…醜い心の声がよく聞こえた…。でもお前は違つたんねんで。面白いくらい素直やつた。俺はヒロが羨しかつたよ。』

俺は隆が羨しかつたよ。

その力がじゃなくて…

隆自身が羨しかつたよ。

『でもお前が瑠璃と居る時だけはお前も嘘つきになつた。お前もアホやなあ（笑）遠慮なんてせえへんかったら俺も楽やつたんに。お前の嘘はある意味苦しかつたで（笑）』

悪かつたな（笑）

『後はお前が守ってやれよ…瑠璃の事幸せにできんやつたら俺呪うからな（笑）』

そりや困るな（笑）

『あつあん時俺が怒つたんはな…あの日お前が死ぬ映像が見えたんや…。俺な死が近い人の死ぬ瞬間と時間が見えるんや…。俺と大学行つたらお前は確實に死んでた。俺が橋から落ちて溺れてるのを助けようとして、お前は飛び込んだ。カナヅチのクセにアホやな（笑）んで俺を助けた後にお前は溺れて死んだ…その映像が見えた。やから嫌な態度とつたんやで。』

す「」い奴だよ…お前は…。

『安心して大学行つたら瑠璃の死ぬ時が見えた。トラックが瑠璃に突つ込んでいく映像が見えた。悩んだんねんけど…決心したよ…俺は瑠璃を守る…俺が消えたつて構わない。』

隆……ズルイよ……。

『ありがとな……隆……。俺忘れへんから……』

こいつらが許されるかよ。

『これが最後じゃねえからな。俺生まれ変わつてもお前の側にいるから。そん時まで待つといでな……。絶対やで……』

分かってるよ……何十年だって何百年だって待つといでやるよ。

『じゅあな……お前がいて本当に良かった。瑠璃は頼むせ。』

ああ……

『ハロ…お前最高やで…！』

『隆より』

俺は泣いていた。

何かが崩れた。

涙はプライドをなくして溢れてきた。

隆はもういない。

でも俺は待つよ。

帰らない人を
：

(後書き)

いかがでしたか??これのその後の続きを書いていきます。

(笑)

最後まで読んでいただきありがとうございます(、 、)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5197a/>

帰らない人

2011年1月4日01時20分発行